生徒の自己調整学習能力を促進するための
カリキュラムと教師の指導に関する一考察

1230434　沖村怜奈
指導教員　中村直人

研究背景

教職課程の学習の中で「個別最適な学び」があることや、日本の教育全体において学習の個別化を図っていることを知った。また GIGA スクール構想や新型コロナウイルス感染症の流行などもあり、一人一台のタブレット端末の配布や学習のオンライン化が進み、個人学習が必要な状況へと変化した。また、新渡戸文化学園にクロスカリキュラムという自律型学習の実践があることを知り、自己調整学習を用いて自律型学習を確立できるカリキュラムと、自己調整学習を促進する教員の介入のあり方について知りたいと思った。

研究目的

本研究は、学習の個性化の実現と、生徒の自己調整学習能力と教員の介入における部分を明らかにするため、実践をもとにカリキュラムと介入のあり方の検討を目的とした。

研究方法

主として Zimmerman と伊藤崇達の自己調整学習のモデルや理論を扱うものとし、先行研究の結果から自己調整学習が促進されるカリキュラムと教員の指導のあり方について考察を行う。

分析結果

生徒の興味・関心を核として、生徒の中にある「なぜ」などの問題を解決していく自律的な学習能力育成のために、新渡戸文化学園のクロスカリキュラムや大学の卒業論文のような活動ができるカリキュラムを作成することが望ましいことが分かった。また、指導のあり方として生徒一人ひとりの普段の様子や性質などを理解し、教員が生徒と向き合い、援助をしていくことが必要である。

考察・結論

自己調整能力を促進していくためには、学習に対する動機を学習者の中で有意味なものにし、個々の学習者に合わせた学習方略の獲得ができれば、学習に対する意欲の向上も見られると考える。子どもの内的な動機に目を向けたカリキュラムの作成・発展と、教員が児童生徒との向き合いを通じて、学習意欲の向上のための支援や介入を適度に行うことが必要だと考察する。